

01

“脳力”があるから 英語力は自然に身につく

・・・・・
本当は教えないのが親の役割

「英語は本来、勉強しないと話せないものではありません」と強調するのは、東京大学教授の酒井邦嘉さん。言語を司る“脳力”的存在に注目する酒井さんに、英語習得における親の役割などを、講義形式で教えてもらいました。



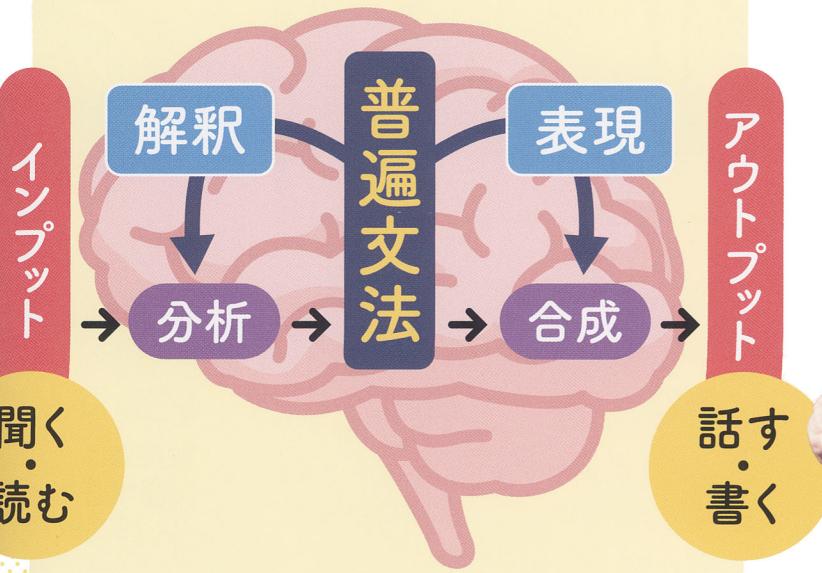
構成=菅野浩二 Sugeno Koji 写真=東川哲也 Higashikawa Tetsuya (写真映像部)、イラスト=yana、iStock.com

はじめに

チョムスキーの生成文法理論とは?

「生成文法理論」とは、アメリカの言語学者ノーム・チョムスキーが1950年代から提唱してきたものです。なぜ乳幼児は自然に言語を操れるようになるのか。チョムスキーは「人間は生まれながらに言語能力を持っているから」という説を唱えました。これを「言語生得説」と言います。

チョムスキーは人間の脳にはあらゆる言語に通じる「普遍文法」が存在すると説明。私たちの研究では左脳の前頭葉に、自然言語に共通して文法を操る「文法中枢」があることがわかつています。乳幼児が自然に話せるようになるのと同じように「習うより慣れよ」という環境を整えれば、母語以外の習得は十分に可能だと言えます。



教えてくれた人

東京大学教授、言語脳科学者
酒井邦嘉さん

東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。ハーバード大学医学部リサーチフェロー、マサチューセッツ工科大学客員研究员などを経て、東京大学大学院総合文化研究科教授に。「チョムスキーと言語脳科学」(集英社インターナショナル)や『勉強しないで身につく英語』(PHP研究所)など著者多数。



言語脳科学から言えば、「教えなければ」という使命感は不要です

グローバルに活躍してほしいから「世界共通語」である英語を小さなうちから教えなければ——。わが子の

未来に期待する親として、そうした重圧にも似た考え方を持つ人もいるかもしれません。

しかし、言語脳科学から言えば、「教えなければ」という使命感は不要です。

なぜなら、アメリカの言語学者であるノーム・チョムスキーが60年以上も前に見抜いたとおり、人間の脳は言語の基盤を生まれつき持っているからです。チョムスキーは乳幼児がごく自然に獲得する「自然言語」について、人間の脳にはあらゆる言語に共通する「普遍文法」という「脳力」が組み込まれていると考えました。

チョムスキーの考えによれば、どの言語も主な文構造は日本語のように核となる語を後ろに置くか、英語のように前に置くかのいずれかであります。この文法規則の基盤となるのが「普遍文法」で

す。実際、私たちは、左脳の前頭葉に、言語の文法判断に共通して関わる「文法中枢」が存在することを実証しています。

「言語を本当の意味で教える」とはできない

ドイツの言語学者、カール・ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは19世紀に、「言語を本当に意味で教えることはできない」と述べました。さらに、「各個人にとつて学習とは大部分が再生・再創造の問題、つまり心の内にある生得的なものを引き出す」という問題である」としており、これはチョムスキーの「普遍文法」の考え方方に近いと言えます。二人の言語学者に従えば、母語を含んだ言語の習得とは、「心の内（あるいは脳の一部、と言います）にある生得的なものを引き出す」ことにほかなりません。言語脳科学から見れば、言語は教えられないものなのです。

人間の脳にすべての言語に

通じ合う「普遍文法」が備わっているので、母語に加え、多言語を同時に習得できます。たとえば、小さなうちから言語力の基礎を固めるには、できるだけいろいろな言語にふれるべきなのです。

英語もまずは耳から脳になじませていく

右ページの図で示したところ、「普遍文法」を機能させて「話す・書く」のアウトプットをスムーズに行うためには、しかるべきインプットが必要です。つまり、効果的な言語習得にはまず質と量の伴う「聞く・読む」が非常に重要な役割になります。

インプットにおいて最初に必要となるのが「聞く」ことです。日本語でも親が話しかける言葉を聞いて覚えていくのと同じで、英語もまずは耳から脳になじませていく。「主語」→「動詞」→「目的語」という語順や、「He」や「She」の一般動詞には「s」

脳で英語になじむための三つのポイント

耳から鍛える

最初のインプットは耳からが鉄則。同じものを何度も聞くのが効果的なので、楽しめる英語のアニメや映画などがよいでしょう。単語だけでなく文として耳から取り込むことでアウトプットもしやすくなります。

大まかに理解する

まずは大まかに全体の流れをつかむようにしましょう。何度も同じ内容を聞いていくうちに、名詞や動詞のニュアンス、三人称単数現在の「s」の存在、あるいは文構造も理屈抜きに理解できるようになります。

意味にはあとからふれる

たとえば「How are you today?」という日常的な表現は、どんな状況で話されるかを知つておけば十分。日本語に意訳してもいいですが、「普遍文法」があるので心配は無用です。

がつくという規則、ある動詞とある前置詞のつながりと、つた見えない型を自然に身につけるには、「反復」がポイントになります。「門前の小僧習わぬ經を読む」ということわざがあるように、常にふれているといつしか覚えてしまうものです。英語のアニメ動画を繰り返し見せたり、英語の歌を何度も聞かせたりするところが、英語の習得において親と一緒に楽しみながらだと、なができる第一歩です。親子で一緒に楽しみながらだと、ながよいでしょう。

多言語が自然に聞こえてくる環境という意味では、私も共同研究をしている「ヒツボファミリークラブ」の取り組みが参考になります。七つの言語を軸に同じ内容の物語を家のあちこちで流す環境で聞くのが特徴で、多言語を自然と操れるようになります。

繰り返しになりますが、人間には生まれつき普遍的な言語機能があるので、英語の勉強を無理強いする必要はありません。まずは耳から自然に同じ内容の英語を反復して取り込み、「普遍文法」という「脳力」を伸ばしてあげる。それが親のできる最大限のサポートです。